

聖書：I サムエル 12：1～25

説教題：誠意をもって主に仕えよ

日時：2016年6月12日（夕拝）

11章でついにイスラエルの初代王サウルが誕生しました。11章15節：「民はみなギルガルへ行き、ギルガルで、主の前に、サウルを王とした。彼らはそこで主の前に和解のいけにえをささげ、サウルとイスラエルのすべての者が、そこで大いに喜んだ。」そして今日の12章を経て、13章からサウル王の働きが記されます。その間にある12章は、イスラエルの統治のあり方が王制に移行するにあたってのサムエルの勧告が記されている章です。これまではサムエルがイスラエルを導く指導者でした。11節で述べられる通り、サムエルは最後のさばきつかさでした。しかし士師の時代はここで終わりとなり、これからイスラエルの王朝時代が始まります。その新しいリーダーシップ体制移行にあたってのサムエルの告別説教がこの12章の内容なのです。

まず彼が述べているのは自分自身の潔白についてです。彼は言っています。私は若い時から今日まで、あなたがたの先に立って歩んで来た。その歩みの中で、何か不正なことをしただろうか。誰かの物を取っただろうか。誰かを苦しめ、迫害したことがあったらうか。わいろを取ったことがあったらうか。もしあったと言うなら、今、私を訴えなさいと。なぜ彼はこんなことを言ったのでしょうか。自分の重要性をもう一度最後にアピールしたかったのでしょうか。そうではないと思います。彼はこの後、イスラエルが王を求めた罪について触れますが、このリーダーシップの変更はサムエルに問題があったからではないということを示すためでしょう。自分の弁護のためと言うよりも、イスラエルの問題点をより明らかにするためでしょう。それにしてもこのように身の潔白をあかしできるとはさすがサムエルです。彼は主から託された務めを忠実に果たして来ました。リーダーたる者が見ならうべき模範がここにあります。

続いてサムエルは6節からイスラエルの歴史を振り返らせています。まず取り上げているのは出エジプトの出来事です。エジプトでイスラエルの民は主に叫びました。すると主はモーセとアロンを遣わして民をそこから連れ出されました。その後、イスラエルは再び苦境に陥りました。彼らはハツォルの将軍シセラの手に、またペリシテ人の手に、

またモアブの王の手に引き渡されました。その中で彼らが罪を悔い、主に叫び求めた時、主は助け手・救助者を与えてくださいました。11 節には主が遣わされたさばきつかさたちの名前が記されています。エルバアル（ギデオン）、ベダン（欄外：バラク）、エフタ、サムエル。こうしてイスラエルは敵から救い出され、安らかに暮らして来ました。なぜサムエルはこのことを振り返ったのでしょうか。それは次のことを明らかにするためでしょう。すなわちイスラエルにはこれまで人間の王はいなかったが、主なる神がいつも彼らを守り、救って下さったということです。このあり方で彼らには何の不都合もなかった。彼らが呼び求めるなら主は常にそこにいて、彼らを守り、助け出してくださいました。

この前置きを経て 12 節でイスラエルの問題が浮き彫りにされます。イスラエルは、アモン人の王ナハシュが攻めて来た時、主が彼らの王であるのに、「いや、王が私たちが治めなければならない」と主張しました。10 章 19 節でも同じことが言われていました。主こそイスラエルをすべての災いと苦しみから救ってくださる方なのに、イスラエルは「いや、私たちの上に王を立ててください」と言いました。サムエルはこのようにして、あなたがたは王を求める必要が全然なかったということを言いたい。彼らの王は主なる神です。この王さえ持っていれば十分でした。ところが彼らは周りの国々のようになりたい。自分たちも立派な軍隊を持ち、力強く立つ王が欲しいと願った。これは主から目を離し、主以外のものに頼ろうとする偶像礼拝に等しいことでした。

しかし驚くべきことは、これまで見て来ましたように、主は彼らの願いを聞き入れられたということです。これは主の非常なあわれみによることでした。以前も参照しましたが、主はイスラエルに王を与えて彼らを祝福する計画を前から持っておられました。創世記の時点から、主はアブラハムに「やがてあなたから王たちが出て来る」と言われました。それならこのイスラエルの願いは良いことだったのではないか、主のみことろと一致することを願っただけではないかとある人は言うかもしれません。しかしそれは表面的な一致にしか過ぎません。何と云ってもイスラエルの動機が正しいものではありませんでした。ですから主は彼らに「わたしはあなたがたのために王を立てて祝福しようと思ったが、これでは白紙撤回だ！無期限に延期だ！」と言ってもおかしくありませんでした。ところが主はイスラエルを忍んで、王制度を導入されたのです。サムエルは

13 節で言っています。「今、見なさい。あなたがたが選び、あなたがたが求めた王を見なさい。主はあなたがたの上に王を置かれた。」これは神の大なる忍耐とあわれみの導き以外の何ものでもありません。この経緯を彼らは良く良く考え、思い巡らさなくてはならないのです。

そのことを思うなら、彼らは心から悔い改め、一層主を恐れて、主に仕える歩みに進まなければなりません。サムエルはそのことを 14～15 節で述べます。これから王制が始まるが、この制度それ自体に救いがあるかのように考えてはならない。イスラエルはまことの王である主こそを恐れ、この方に従うところに真の幸いがあるのです。そうでなければ、過去にも起こったような災いがあなたがたの上にも下る、とサムエルは 15 節で警告しています。

さてサムエルは以上のメッセージだけではこの時のイスラエルには不十分だと知っていたのでしょう。そこでこのアピールを一層有効なものとするために 16～17 節のように言います。「今一度立って、主があなたがたの目の前で行なわれるこの大きなみわざを見なさい。今は小麦の刈り入れ時ではないか。だが私が主に呼び求めると、主は雷と雨とを下される。あなたがたは王を求めて、主のみこころを大いにそこなったことを悟り、心に留めなさい。」小麦の刈り入れ時は乾期にあたり、雨の降らない時期でした。しかしサムエルが主を呼ぶと、彼らの目の前で雷と雨が下りました。人間的に考えれば、あり得ないことでした。このことは主はいつでも彼らの目に不思議なみわざを行なうことができるということを意味します。彼らが主に従わなければ、いつでも大変なさばきを下すことができるのです。このみわざを前にして、彼らは主とサムエルを非常に恐れます。そして彼らの口からは悔い改めの言葉が出て来ました。彼らはここで自分たちの罪を自覚し、震えたのです。そして自分たちはこれまであらゆる罪を犯して来たということに思いが至らせられ、その上に王を求めるといふ悪をさらに加えたことを告白せざるを得なかったのです。

ここに私たちの心はいかに眠りこみやすい状態にあるかが示されています。彼らはサムエルの言葉を聞くだけでは特別に何も感じませんでした。ものすごい雷と雨を前にして、自分たちは恐るべき主の前に立っていることが分かった。図々しい姿を主の前に

さらけ出していることに気づかされた。そして直ちに罪を告白し、赦しを希わずにいられなかった。主がこうされたのは、ただ彼らを震え上がらせるためでなく、彼らを神との正しい関係に立ち返らせるためです。私たちも時に眠りこけていた心が叩き起こされる経験をするところがあるでしょう。思わぬ苦境に投げ入れられたり、病の中に置かれたり、大変なピンチの中に置かれたり。しかしそれは私たちを正しいあり方に立ち返らせようとする神の導きなのではないでしょうか。

恐れ震える民にサムエルは 20 節のように言いました。「恐れてはならない。あなたがたは、このすべての悪を行なった。しかし主に従い、わきにそれず、心を尽くして主に仕えなさい。」なぜ恐れなくて良いのでしょうか。それは主が私たちの罪を赦してくださるからでしょう。イスラエルは自分たちのこれまでの罪を示され、その上、王を求めるという大罪を加えたことに恐れおののいています。しかし主は恐れなくて良いと言ってくれました。そのことはもう良い。そしてあなたがたがこれから心に向けるべきは「主に従い、わきにそれず、心を尽くして主に仕える」ことだとサムエルは言います。犯してしまった罪のことでいつまでも悩み、その心が責められ続けるべきではない。主に告白し、赦しを受けたなら、あとは心を尽くして主に仕える歩みにあなたがたの心を傾けなさい！そのことにエネルギーを注ぎなさい！とされています。これは後にもう一度触れますが、私たちにとって大いなる慰めの言葉ではないでしょうか。

そしてサムエルは 22 節で、主がこのようにしてくださるのはご自分の御名のためだと言います。イスラエルがここで捨てられないのは、イスラエルが立派だからではなく、ただ神の恵みによることなのです。そして 23 節ではサムエルもまたイスラエルを捨てないと言います。主と心が一つの者として、これからもイスラエルのためにとりなし続けると約束します。何と力強い言葉でしょう。ですから彼らは一層、主の恵みに感謝して、主に応答の歩みをささげることに専心しなければなりません。サムエルは 24 節で「ただ、主を恐れ、心を尽くし、誠意をもって主に仕えなさい。主がどれほど偉大なことをあなたがたになさったかを見分けなさい。」と言います。そしてもしここまでの恵みを示されながら悪を重ねるなら、「あなたがたも、あなたがたも王も滅ぼし尽くされる」と 25 節で言います。この警告も彼らはきちんと聞かなければなりません。

以上の箇所から私たちは何を自分に当てはめて考えるべきでしょうか。私たちはこの章に、イスラエルがどんなに大きな神のあわれみによって支えられているかを見ました。イスラエルはこれまでの悪に加えて、さらに王を求めるといふとんでもない罪を犯しました。そんな彼らがこうして支えられていたのは、ただ主の忍耐とあわれみによることでした。同じように私たちが今日こうして御前に立つことが赦されているのは、ただ神のへりくだりと愛によるのではないのでしょうか。哀歌3章22節：「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。」 私たちはそのことを自分に当てはめて思い巡らしたいのです。それゆえに、心を尽くして主に仕えよ！というサムエルの言葉を自分に対する勧告として聞きたいのです。

そしてこれと合わせて考えたいもう一つのことは、私たちが犯してしまった罪の問題についてです。私たちもそれぞれ主の前で示される過去に犯したある大きな罪のことが心にあるかもしれません。できることなら時間を逆戻りして人生の履歴から消したいと思う罪。ともすると何かあるごとに心にかかり、責められる思いに悩まされる罪があるかもしれません。しかし主はここで言うておられます。そのことでいつまでも恐れてはならない。あなたは確かにそのことをした。しかしそれをわたしは赦している。そのあなたが今からすべきことは心を尽くしてわたしに仕えることである、と。私たちは過去の罪に捕らわれ、それをいつも思い起こして頭の中でリプレイして打ちのめされる必要はないのです。そうではなく、あなたはこれから主に心を尽くして従うことにエネルギーを向ければ良い。それで良いと主は言うて下さっています。私たちは感謝してこのメッセージを自分に当てはめたいと思います。主は王を求めたイスラエルをいつまでも責め続けてはおられません。主は彼らの罪を赦し、彼らが感謝をもって主に誠実に歩むことを欲しておられます。そして主はこの王制を逆に彼らを祝福するための方法として用いて行かれます。私たちも罪を御前で告白し、悔いたなら、主の赦しを感謝しつつ受け止め、そこにいつまでもこだわるのではなく、誠意をもって主に仕える歩みに自分をささげたいと思います。そうするなら主は私たちの罪や誤りを越えて、良きものをそこから取り出して、私たちを祝福へと導いてくださいます。